栄花物語

1.098
1

5利川門
1090
10

栄花物語巻一

月宴

巻二 寛平二年八月十五夜清涼殿ノ月宴有ニヨリ

昌泰三年ニ延長八年ニ都而三十三年

世はじまりて後この御門六十余代までは世始めの
きれとこゝかしこに次第に出でおはしまして
るをかしうすべき世中に宇多(五十九代)の御門の
おぼしまうけてその御子ども源氏になしたてまつり
井よ一の皇子敦仁(あつひと)の親王を醍醐(六十代延喜)の帝とぞ
ゑ給ひにし御なりにひき続きて
いとゝ世のひゞきおはしまさふ
男皇子十六人女みこたまひけり
大政大臣基経(昭宣公)のおとゞきさきをはじめ奉りて

長良 太郎 国経大納言 次郎遠経右大弁 三郎基経 昭宣公 忠仁公良房養子 母贈太政大臣総継女 寛平三正十三日薨 五十六

御時にうせ給ふ中納言長良と聞え奉るは太政
大臣冬嗣の御太郎にておはしける後また贈太政大臣と
きこえさせけるかの御三郎にておはし基経そのおとゝの
おとゝうせ給ひて後の御諡昭宣公と聞えさせけるその基
経のおとこ君にておはします太郎は時平と聞えけり
左大臣まてなり給ひて卅九にてそうせ給ひきその次郎
仲平と聞えける左大臣にて歳のほと七十一まてうせ給は
ざりき三郎兼平と聞えける三位まてそおはしける四郎忠平
のおとゝ我太政大臣まて成のほとおほくの年ころなと
させ給ふその基経のおとゝの御女の女御と申は
みなこの帝くらゐ数多おはしましける十一の宮寛明の親王
と申き御門にたちて十六年おはしましてのちに
おりさせ給ひておはしますをやかて朱雀院と申すは

文彦太子女王 熈子女王 天平七二十九 為女御

十六歳にて位につかせおはしまし女御をは御姉の十のみこ
成明の親王と申ける御はらからにて御門まてなさせ給ひのひよ
き天慶九年四月十三日まてそなさせ給ふ朱雀院は
おりさせ給ひて後の王女御と聞えさせける御ちかひにえものゝ
うせ給ひき女みこ一所そおはしましける母女御をみこ三まて
守せたまひしに御門におはしてところ〳〵おはしましのち
御しなひなかりけるいつくし后にもえなられさせ給はて
みれ例ならぬ御心地にてすくれ給はぬけれ昌子
内親王ときこえさせけるかくて今の御子(村上)
かうまつりしあるへきかぎりおほしく醍醐の聖帝
世にかくておはしましける又この御子と是れ子孫
ならひやうに大かたの御心まてきこえしうるはしかし
かうおりしまにも扎うる御をえも心ちかりし和哥ならぬも

いうしうきむすめよろつになまめきけなりけり梅のえたおりし
まし我こゝの女御なとやうにも参りあつまりてかまへ給ふ時
ゆゑも時すきにも御心けしきのあとはかりき見と伴せてそ施
うまいけりいふしかすをはしくもへかともさうかくたまいに
御のゑたかさけ花をくらくたうちへやかしてなき
給うるをとくさう給くまゐれきし女御こやす所そらのけ中
雨伊勢のやうにて世のきこえ給く昔く次
あそして御子生れたまへるはさ給ふるおもくしくかくれ
させ給ひぬるさ右大臣御擁護となりくあれくす
心なき日なとは御まへに出くて碁すくなくうち
梅んなとの世石なとの我せすうちて御覧しかともてそおそ
きまうきされそこれくさ実入りなすきかたとをかしうなん
おりしからいたまて

かくてとの御心のめてたきは吹風も枝をならさす
なとあめるやうに春の花もにほひのとかにて紅葉
も枝にとまりていと心のとかなる御有さまなり今の
大政大臣と申すは基経のおとゝの御子四郎忠平のおとゝ
おとゝみかとの御をちにおはしませは世もいとゝしつかにおはしますそのおとゝ
の御子は五人そおはしける太郎は今の左大臣にて実頼
と申て小野宮といふ所にすみ給ふ次郎は右の大臣にて師輔
のおとゝ九条といふ所に住給ふ三郎の君はおなしおほとのにおはしまし
四郎師氏と申ける大納言にまします小一条宰相五郎師尹の
左大臣と申て小一条といふ所に住給ふ此きみたちは今は
おとゝのけこともやうやう世をしらむとおほさるゝ後はしらてかくは
し後ところみかとの御はらとも北方くおほくおはするなかに
九条の師輔のおとゝいとたのもしくおはしてむすめの北方の

此殿は男十一人女六人ぞおはしましける小野宮の大臣殿のは
その三君三人ぞおはしけるまた女君をおはしけりいとところ〳〵
宮殿は見すておはしますてはさきに女御にておはしはさせたまふ
さゝくすてかいはれ小一条の師尹のおとゞおのこゝろ二人女一所ぞ
おはします
うちなるおのこ君のこゝろはそれそうちなる女御にかくて女御
おはしますとしこゝろ九条のおほきおとゞにおはします
かゝるの中に一の女御まくさふらひ給又今のみやと聞え給ふか
衰重明の式部卿の宮の御むすめも女御にてさふらひ給ふ
御かたちの代明の中務の宮の御むすめ女御藤原家殿の女御にて
さふらひ給又在衡のあさち大納言のむすめあさちの御息所
いとくはひ給小一条の師尹のおとゞの御女いとうつくし
くしくて宣耀殿の女御と聞えけり又広幡中納言庶明
の女御きこえさせ給御息所とそおはします次さきぬもこの御子

これにこ生まれぬつ宮をありみこむまれ給ぬこそやむことなけれ
ありもなまめかしうて給はすとこそ元方民部卿のむすめ
まいりの更衣年ころ東宮をかくて東宮にひとつせ給ぬるより
東宮ありさまの給をぬまさきくらされさるかくれ給はかたやむ
ごとなくみこ生まれおはしましけるかたとふ九条殿の女御
きこふそかくおはしそめくたえてたえこそうしかと女みこ
すけくいとはいかゝしとまへしかくそのよろこひにかならすは
させられ世さゝを給ぬる元方の御息所女御もおはしぬるの由
中にはさて給ぬるいはしかおのこ君は生まれのこの御ありさまへ文
あらちえくたつる廣平の中宮の御子一のみこ生まれ
あつきのおほかめてさ保たしさらくありうらよろこひ
はなうしよりもえて例のさまのほうれはしくもまたりて
なかしかるこの元方の大納言いそぐいたはしくこの東宮に

ゐる世ぶかくて万さぬかなうるふのゆすのわがみこ（廣平）
本意よりもおもましくおぼしおきてし（たゝ）
ことをうしう世中よ（めぐ）みおもほふ九条（師輔）とのゝ女（あ）
ばらにいつきかしづきたてまつりたまへるを
乃大納言（くにつな）なども世ふりうとくいろこもさせたまはで元方
宮（女子 村上の女御）のみこ（子也）
宮（忠平）おはしますことをも九条（師輔）殿もいとうれしう
うら（村上）やみ世はとあれまかうれたまへるを
神（忠平）くものりきことよおかしめ寸なとくりかへ
し（忠平）ゐやうに改大臣（かへ）後月比
天暦三年八月十（廿）日ころ女子（貴子 師輔）
信（のぶ）くなりまはりぬ（給）ひぬるをたゞ
そらをいとまなくたゝ
うやうぬるひとつにてよろづ

ゐりくしきて女御（安子）をは宣耀殿の女御を
おもくもてかしづきいつき出（い）でたてまつりたまへる
世をそしもあやしの下（しも）まではこの人（ひと）
は世の人（ひと）うくおぼえたまへるに
は益貞信公（ゆ）きくれはきくれ
ゐくゐりてく世のうちはなべて実（まこと）
まいりつゝ九条（師輔）との二（ふた）ところ
二（ふた）ところ（とこ）ろ（ゐ）
天暦二年五月廿（はつか）九条（師輔）殿
おはしまし（村上）ては御（ご）ぜんたちこえこうみなり
ふるまひてそ世（よ）はおもほしたりしかばいと大（おほ）きなる
元（もと）すゑ大納言かくてきくにむつまじくなるこゝち
地をふみとゞろかしてなりいでくるここちし
ゐるかれもこゝにおはするかとおぼえ

新るぬほとのうちにもいましきをもおほしおほさぬかとの
宮ら気さやうにさとしてなせくしうそれおほしおきそそう
けるに小野宮と相くそうらすむありきる東宮やうく
わらをけさ給はせ給ふにつらうすいくてうわらしはせ
すつけるも九条殿の御おほえ伊尹みしうゆへてこし弟た
冥のこやうちへわくし御とそめしくたきやつ留ほとよ天とく
二年七月廿七日ち九条殿の女御きゆ給はせ給ふ後
ちうれ安子中かし今ハ中くらやきこえさせ給ふ中宮の大夫
るは之とのはたらかしける明のこゝんまときこえさせ給ひし
いすは源氏すくなくまかりくわへ給ふそあり給ふそる
まさくの宮はうさもおろこと小色くひなすせ給ふ九条殿の
しきそ御母まいるかい有くゆへてしとの宮は女御の
おほんことを口わしく見へてたり小野宮のおとゝの北大方
おかねかく敦敏とていとおほえありくわくせし一とゆうらせ
給ふしそかしそのおほんえひすしく伊尹とくらいゑの御給
計るを御かへしうらつく小野のおかねの君ふとて昆となり
きわしも見給ておもくとくみ給ける
後撰をえらはれ給ふ事ゆるまさのおほんころまて
撰はれけることは実頼の大臣哥とものこと給をわれくつうめしそと
さうほふゆくわくし侍てとかくにふこれしかとくなるとも
なり我よみうへけせのみつきそもの一言なり御入女帝のにもよ天平
天暦五年にこそ大臣橘諸兄公は大臣にて女帝の御よにあひてまん
えうえふとえて撰給ひ今はこれさいの御時とて今廿七年
えうそ給へ世給くよふかめてたく世ゝ給へ今かへて
廿よ年なりい今しへの今わしゆるせあてしきうつえり
とうるへさを給く世をめくたうせさを給こはおほんゆるは

小野宮のおとゝはいみしき御ともしの色も今めかしくせんさう殿にて
あらまほしくてこせんしふといふ名をつけさせ給ひて
此度せんしふさせ給へるそかし其和歌もこのたひみくま集
おほく見ゆる中にいみしう見ゆめり古今にてはつらゆき
おほくとらせ給へるなかにも後撰集をは
さるへきもの見しけれはかれらのうたのそはつらゆき
はかなきことゝもいみしうおほえ給へりけるも
うちそひて御いけの今はさるへき人ともおほくて
人々にて色あるをおもしろしとおほしけり小野宮の
二郎三郎なと敦敏のきみ三位右衛門督なと
給へりけるうちにもけふはかり二位左衛門督にて
のちはおほくの御たくひもなかりし右衛門督の御むすめは
てかんしうなりしのちもみえぬかりけるかくて

やうやうおとなひ給ふこそいみしくもおかしかりけれ
給ふ右大臣の御むすめにておはしけれ中宮も二所とも
おほしたちたる御ありさまなれは実資はいまた
なかなかにし惜しう少将の君もいとけなくて十計
言たちはかりおほしけるにいますこしおとなひ給へり
との式部卿の宮の御むすめ中宮ときこえしかは九条
宮の小野宮のおほえはおなしく二人の女御たち
手つから東宮をまうけ給ひて年の三月に
大納言なくなりぬる故の一のみこの女御をうみ給ひき
う世なかしこく中のけしきもあいなきことゝもにて
式部卿物の宮すくともすかに御こゝろなやみ給へる所
やうやうはしけになりてとかく給ふる中にもおほん
かくしていまもしう聞えさせたまひしことかきりなし

なりうさうもなくも仕まつりうせ候ことのしらくよはひ
のつれづれとながめくらしおはしますにたうとくもしきたうとくもおぼえさせおはしますを
御前（高明卿）ぬまいりたまふ（村上）おそくまいりたまふとてきはやかにも（海子）妨げきこえたまはぬものから
御前（同）のたまはせつることどもうちかたらひたまひて（同）御前（同）
をいときよらにもてなしたまへるかなとおぼしたるに（同）
（荘子）高明卿の七夕をとりうしなひおはしたるをうらめしとおぼしたるに（荘子）
（在衛女）乃ちこたへきこえたまふ（同）

なまおそろしう百歳をかぎりたる老ひ（徴子）
おとろへまどひたるものの語りいでたるを
（徴子）妨げきこえたまはぬ（海子）
さる里ごころまでは（海子）
かたはらいたしやしうなほすうらうじ
きこえおかさまほしうおぼえたまふ
は七壇の御修法（村上）
多く妨げきこえおこなはせたまふ（同）
こころさしをおこしたまへるしるしにや
えおきあがりたまはぬほどうれしきことかぎりなし
いくほどもなくてとかくせさせたまひて
我れをおそしとや（村上）
ものおぼしめしたるさまいとあはれなり

かくさせよしおきてさうなどかくてほどへてあまた侍るも
ぬえのうちあへぬものおぼしうてあ
りてうさえとまらおとてうせて
ありまさてんとかしくらへ
みくとかなりくなん物のくいさてせなどこそ
色ものをゆのるとかんめのとの侍の余
ねらめとてふ式のこと佐余ねるとこ
うろこれをの宮ねいうろきろうかく
伊こてうえるることをうちつ
ねほふ知とこのほんいそ
このの村上きりのそなき六月つこた
をんかこおほし出くれみ物をふおきにもれ宮のお迎
おとえいかうくおとこ君くもらへな
こそこのこ中ねふえをうしきをもくろやうるをなくれは是
ほうふかこまうえうち内小条
まえをえふうこえてそまうを
たうおくますほふのはをとにくそきもうけふく
くそあえこれすみ深ふうこのきたのくいちうき
出火をうまてうおほするうなれきふも是
ほをおそ後うねるしうふほさそのちまこれ
ひふくまのう知くとなまとくうくそしのまふ
くちねそんつふるとおほくえそほとふれを知て君
くらうう上のひことのことねの知くきくみまをと
おほせれきれそかほるすあうきるなそのきてきるも出さ
てこころおそますはるとくねにないふつきても心を
かうしうそいとえ佐をくかしこほうくてくく
とそうまのうをいとふもあた

おほしめしたるほとは今ちくゆるかにことにもあらさりけるをなすとも
うしろめたき御ことをこの君たちもおもしろくなりぬる
さる宮はさるはなりきこえ給ふらんかしこはまさにおほせ
られてまゐる宮には御心の事のほかことにおほしきこゆとて
ものかたりの絵をはかなきなとかはさまとおもしろきにはかりよりぞや
うちえらひ給へはとのも宮にもこなたもしてなりのくはしくおほしさる宮し
けくすゝめたまふ弘徽殿の御かたにはひきこえてこそあれとる
こしてはとの御方にまゐりてはなをさくものからあらはれつゝに
あさやかなるはかり宮たちの御ゆかりのとなりとやさしうもぬ
ことふえのうへにあることのしつかにおはしますことのおもかくは
おほしめすにきこえさせたまふことものかはりのなすとし給はん
御うしろにさふらひたまふにもいとくかくはしりて侍らくすれは
宮の御かたの御ありさまことにのいとしのひきこえぬなに

かゝることともは今はいとはかなきやうなれとそして
そのみやにはいとふかきこゝろあるまはりのきのふちにあて
たゝかひきこえてもせぬ御よのきかぬさまにてよろつのことをおもひ
せ給はぬさまなるにつけて今日をはたのしみことにおもひたま
ことそわかしきさるほとになりにしをわかやかになりにしかとおほし
されたる御心ありて今のこゝろもはなれてゐさせ給ふことのきこえ
をさせ給へるたゝ御おやの御子なとうみ給へる御さまなとき給
にもさるへくあさましとおほしめしの給ふもなくなりのほとにのさせ
給ひはなちかたの君たちもさらにいはんかたなくおほしのこと
をさせたまひて御心をしめしたてまつりたまひぬるほとに
をちをおほしめしてのちにあれにつかへまつりぬなとと
きこえさするに君は御心の世にもまつたくうきことのいて
きたる人の御ありさまはこれはいとくちをしくおほしめし給

九方

源氏の右(高明)大将なくなりぬうち大しんなふ(師尹)家のおとゞ
もうせぬ久しくの(高明)ぞ(れ)給ひぬるまゝとかさまくこの
かの世のあるじをそんじ給ひぬるおぼえめさ
う聞つゞけ給ふ八年等かうち
給てふさぎ給ふくのよ(懐子)ろこびもかつはくやしく九条(師輔)殿
の君大納言ふるうねくこと
女きみたちのまゐりおくれ給へるかしこ(懐子)
ことをいふことなう二月
きこしめして中宮(昌子)も
物の(冷泉)ぬれおはしまさんこと
けふ二月(懐子)ばかりよ女院まゐ
面しろことなかりくこ
ふもたゞぬ物(冷泉)ぬきふくく

ふこんもの(昌子)ぬまでくおはさまほ
うまつりきこえふ(冷泉)のうをはしめ
養して出(姉御)給ひぬと
九てうとのをそなうかくこ
出でうはもうちより
の(昌子)中宮うよりいと世
今をほいとおくもくこ
うのうへ人をみ海すくをこ
舎人と乃もるめ
かうきことおほうの伊(懐子)尹の
とのときこゆる(懐子)世の中
をうとうふうくこ
おくはまへふかうこ(花山)

こゝそゝとかくうはくるをきくもおうてにの(為平)
ゐひとつ(高明)ゐる〳〵ハ源氏のおとゝ(高明)
こゝろ〳〵ものをおもふとよふかるゝ
伊とおとゝうおてさせん
をそる〳〵ひかいておそうさせおとゝ
さ男ゐたすおうさ(冷泉)ものきこゆをふ事ゐ
をおもてこひのやうにゐれとゐ
かゐ〳〵次なるきことふかゐ一ゐ
くのゐくこゝ事よこそいな
ふっこのをえさせ給うかゐ
ことをいひ出るや我れをけいむ(高明)の九れおとゝ(為平)の
宮ゐはこゝとをえてくみとゐ
ふことをいくそよふおゐ(為平)ゐ
かゐあこゝ〳〵ゐとよ人ゝふる仏神のゐおうてり
宣ふけんのうちもゐきこゝろやゐうき事ゐ三月廿六ふ
(高明)九九大臣とのよきひゐる〳〵うちかみく宣命よみ乃もとく帯
をふけ事ゐおゐふる法みよふうてお事ゐ(村岡)よりて
ゐ〳〵ゐとゐふことをゐみのもるゐハ出くゐもきちやう
乃事ゐうくゐいきよぬくた
(為平)てゐ九ゐ事ゐうくゐゐる乃事ゐうくゐいきよぬくた
きとおゐふ(為平)ゐの湯こゝろおゐくふみ
おゐするせんうきれくおゐさまてくれをくいてきたることと
のふきてゐ(師浦女三君)ゐ出むとめをとこ君(統房後賢)こゝろおうるとゐの
うちのなうれゐうこゐるくむてもうくれおとのなの
さま〳〵ゐとゝよのゐくうるゐこゝろまハ法ゐう
ゐ〳〵きめをとくわきゐとゐ

すへらきと申きこゆるやうにかくおりさせ給ひて乃ち安和二年
八月十三日みかとおりさせ給ぬれは東宮守平位に即せ給ぬ此東
宮の東宮にはおりゐ給ぬるみこともこそのちになりせ給ぬ師貞
の親王を御代の伊尹の大納言の御むすめの女御のうみ奉り給へるなりとての
みこと申は冷泉院の東宮の御ことなりけるを冷泉院と申きこえし
御すゑの御代の御弟にておはしましき実政の宣旨かうぶり
給ぬ師尹のおとゝは左大臣にておはしけれ御禊大嘗会など
ありけるをは世の人さまさまに申けるに小一条の左大臣とも
きこゆるおとゝ給ける十月十四日年五十にて失せ給ぬとの事
宣耀殿の女御をこそ君のうちしめて万事
今は摂政との御はからひ給ては世に大嘗会の
事のもと口おしう思はせとなく
御ゆくゑおもひあはせられ候ける世中の事の

代のかはりにもあらく事なくこそ東宮は今の御門と申て
すゑはおはします世の御子の殿上人まうつるみなとして出たまはせ
給へれはうちにゆきようせさせ給ひも御子にて御ぬれは
天禄元年ぞかし元服し給ひける御年十六にてなり給ひし給を
いとめてたしと小一条の大臣の御かたさまの御孫にて在衛の大将
おはしますものをかくなきことをぞ正月廿七日うせ給ぬ御年五十
七十八日てのちあまりにおほやけきこしめしけるきとのたまはせつ
またこの右大臣すく伊尹とおほとのゝ摂政と申もわかう
うちおほえらうらうしくおはしましてうちとけてはおはしま
さすいみしくことしみてまさに小野宮の実頼のおとゝも非常の事と
おほしますさはいけりしおとゝ世は之くせ給ひとてはさるへき
人くものかくおはしますこの御ほときはみし二条の大将
すへて花山とておはしけむ摂政殿の御ためにもいとおほくおはしまし

[illegible]院のかくれ給ひ
[illegible]永子
[illegible]幸ひて[illegible]
[illegible]よりて[illegible]
[illegible]汾陽
宰相を[illegible]
[illegible]
[illegible]言
[illegible]
[illegible]
[illegible]

かくて一条摂政（伊尹）花と
くまでのきこうめ世と
ます世をそむきて
こんのこと
閑ありぬべきも
もえぬ世のひきとそ
おれのはりふ（友）
せうれいいうのよ

久まこ（我孝）
ふ河のかみういふくまと（一家）
天福二年十月の（奥賀）
女君ら（我孝）

ゐをこ君ら九五人おくりて今のうちをふかひ申てび
まお海くう九てうとのこ三原君家へたゝう東三条殿へう大将
大納言ゐとゆの冷泉院の女御子へことゝ北の方殿へうま
きことふ定へめきゐつくゝ中将君のおことゝ紙つくゝと定へ
めたおとくうくの御子四郎へたいてと
おほさるまてこれ定白と東道へ東宮ト
くゝ次のこおくゝすゐふかこ娘子へかくてさふくも北殿へて津
すくくお海さ爺へう紙へ天延二年ふうう如
定白との大政大臣殿へうきゐを移
につきてもノ多く九条殿へのこはとゝ紙のくゝ世よきこゝえさゐ
小野宮殿へのゐ三前お九多くゐ中将
いとくおそうけまゐ定へ東道ヨロツ
させ給きことはよの中よりをとうふのいくゝ北てよ

もふの人よこもやこうきゐうきゐ宮女う世おくこのお海う
ここゝゆる中も前の按察伊尹政とのくおけ世う拳賢
月しゐうちおきう取方ふかいの多ゐ小野
うけくことを世中れ定へ東道
きうくゐうまのいはくゐすゐし東三条家とのこ
定白東道ものゐ中ことふ
きゝえうくこれ大将家へをうなりてとそはんる
かくくく大とのゐ定へけまゐ東道
中将君詮子をうちよおゐ世ふひりくいのそふのおそ
祓しうくきそこと定へとうゐ定へ東道ミチ
をれとその前き人なこの坂殿のとものこ
東三条家へのとゐ多く宝院をそ東道家に

まゐる馬車をえ大ものゝ（兼道）おいそまじきことゝ
いふときこえ給てく悲れうまこえて御ぐしもたげ給
給ふまゝにえとゞめさせ給はでおはしまし
ぬるをえさのひくくまゐるくをかりきさせ給
ふ（兼家）のみかどの（詮子）さい娘君おはせんおとえ給ひ
ぬることなのめに大ものゝきこえ（兼道）
給ふをきゝ給ひて（皇子）中宮はえ（兼家）
かくこゝろ深もあさきうえ
ふことなきに（兼家）おぼしめしたるさまを
おぼしめしくさゝもなのめ
うちぬ貞ええ年ごのえるみ
きこゆるは（兼家）東三条殿大将のは（超子）
てもおそしとまつり給ふを二月
その比（兼道）おとゝいふうせ給ひて（兼家）東三条殿
大将（冷泉）院の（超子）女院をとこえこうみ給
ちをおくみきことをはゝくの給せ給ふまゝに
えてのうさえさくおぼせきこえさせ給
ふのうさえ給ひて（三条）
給ふこもれのうみ（冷泉）
給ますえをいてうまつ
ひきこえさ給ひて（兼道）
りたまや東三条殿（兼家）
ふむきこえ給ひて大将
（兼家）
おぼの（冷泉）
人まえやうにて
まいえ（山陵）

敦定男
清門

うう宮うけつぐべき大将よ小二条殿(師平)のおはしまし時の
中納言ゐうの給ひぬ東二条殿(兼家)おはしまさずなりぬる
ほうみづしき垂井の社(やしろ)の
家のこれ君ぐうの出(いで)たまふらんのくたよりあさぼらけ
おほさまでうかゝ給ふ(兼通)ものの
ものをとくとくをふやさんこうもすまして
給(たま)ふ東二条殿(兼家)うけ大将をえ
て内よりの世給(たま)ふ第(ヨロシ)
行とゐうむとゆるされぬ
三宮の位ようせ給ぬる
三ゐう忠我公と申(まうす)盗を
志ましつゝきる東二条殿(兼家)うけ大納言
をゐうしをの宮のうの忠のおとゝ
ゆきよりつゝ一日そうしてゐ
て打ゐ月の十日実(まこと)
うりぬかさゐ
中納言(媄子)ゐうの給ふ
中納言ゐうと給ふ
むまれのいをとこ(三条)
ゐうくむまの給ふ
又ゐうをゐうひ給ふ
しかくてゐうをうぬ
大将(道)ゐうと内よりの
日をゐうくゐうぬ年
十ゐう余日ゐうく
大后よ雅信のおとゝゐう

(四条)
(朝光)
(冷泉)
(頭光)
(起)
(兼家)
(道)
(兼家)
(兼家)

嫉君うらさまのつせをうらめしと伊こ
そうのくたきうらさびしのくに布ねるもわくらんまくに
おくまつ次、梅津かを大うゐめけ
をしすまこめくひのおきをうらけるまハ一二をハちのくに
くゑてせゆまとくゐめけるうさぬるもうらさ
ゐきこゑさせおてくゐもおくらまきぬるうをうもうゑ
ゐるもくみてめけるせぬとをんなめけるまハ今はおてまつ
ようもおろうさきよくうらくてんとこれのうちなきうら
おうるる恋はされし东三条家ゑとほろぬきうちとゑ更ゆゑ
ゐうるもてこうようるせゐ姫君ハ今はおてまつ
ふもくみてめけるせぬとをんなめけるまハ今はおてまつ
うさうきよくうらくてんとこれのうちなきうら
おうるる恋はされし东三条家ゑとほろぬきうちとゑ更ゆゑ
ゐうるもてこうようるせゐ姫君ハ今はおてまつ
ふもくみてめけるせぬとをんなめけるまハ今はおてまつ
うさうきよくうらくてんとこれのうちなきうら
おうるる恋はされし东三条家ゑとほろぬきうちとゑ更ゆゑ
ゐうるもてこうようるせゐ姫君ハ今はおてまつ
ふもくみてめけるせぬとをんなめけるまハ今はおてまつ
うさうきよくうらくてんとこれのうちなきうら
おうるる恋はされし东三条家ゑとほろぬきうちとゑ更ゆゑ
ゐうるもてこうようるせゐ姫君ハ今はおてまつ

まさこらんとそよのくわにこひける東家れたくよの中な
ほんのうちまさてお[illegible]めまと[illegible]ぬさほる
おかうりちひそえるうる[illegible]ほうこうるや
ゆうまほをえるせのまいかほをる天之元年
まりぬそと[illegible]ほんのうちれほ[illegible]
かをもし[illegible]ともに二月よりかう[illegible]
ことをうにえるを也給みて[illegible]
つくおりるんこのこそいそ[illegible]
よおそまほをやそうぬとそ[illegible]
人ふりうぬと[illegible]ことめほ[illegible]
ちとき今れ東宮れいをうとの女二宮まるせのてしう
つそう宮うりうりくあうし[illegible]をまるをねひく祖も
なくうちるとやけするえのこて[illegible]
かひとろ[illegible]せおるこれ[illegible]
給をこそそしけ女[illegible]后まをそ
うまおほうて一のこおしま
女[illegible]ろおくんを世のくいふ
そうぬそよまれるとそ[illegible]
今はそうともかてもうおろ
しけのとおそうまあそ
くそ人ま次おほいくねる
そすかほそをりきこ
くふとかて女[illegible]のけをれ
おてした女[illegible]んとけしるは
いふことをそうきておくさあう
津きおくそいきこえさせおて

天元五年正月廿八日

かのきこえさせつゝきたまへは東三てうとのゝ(兼家)院の女御(超子)はれいのにも
梅壺(詮子)の女御の御かたにもわかき人々のすゝめにて庚申なされ
せさせ給へとゆるさせ給へは御方にもこれせさせ給ひてとこ君たち
この女御(超子 詮子)たちの御はらからの君たち(道隆道兼道長)そおはしましてきようなる
おとなしきいとこたちとまくらなとして年わかき人ほとかよもすからなと
のたまひてさまさまのことゝもして御遊せさせ給ふよるそやう〱と
なりゆくほとにあかつきのほとにおもしろき女房たち(暴)こゝろく
にくれなとのことゝもをいとをかしくてこれ君たちのおはしませは
あやしくこそいれとおもひなしてけしきはかりかしこまりて
ふしもなくてむきぬ院の女御(超子)暁かたになりて御わきそくにより
おはしますをおとゝのこまりつとりて今宵はたゝかくてなとゝ
たれそえさせ給ふとかしこまりてかたはらにいり給へは御こゝろもちのいみし
さはかしくおとなひけるほとも御とのこもりて御覧し給へは

たへとてけはひいとこ君たちやすめのきさせ給ふ今さらになにかの
はとのこまりかかさせ給ひけきこえさせ給ふほとにいつしかもあはれ
くれとの給へは御こゝろはちりて御ことゝ御覧せさせ給ふにはかに
きえいらせ給ひぬおとろきたまひてやかて御こゝち(超子)きえさせ給ひ
ぬまへは殿(兼家)はしらせ給ひて御とのこもりよせて見たてまつらせさ
せ給ふになりきこえおほせらるへき御いのりなとも御すほうとかく御悩
さはいて(兼家)とのは万の御いのりともとさはかせ給ひてさま〱の
事をいひつゝきこえさせ給ひて御ともひさしかりけれとも人なき
御しつむしきまへはいつしか御めもみえさせ給はすなりぬれは世の
うちとりみたれてさはかしき殿もおほしなけかれ
はかなきとゝろまてもしはすにいよ〱こそ御かなしくてかき
みせたてまつり御仏なとの御そよりもあはれなるに御心の御そ
ちりたりてはてゝかくうれしうてこそいまへてかきをあり

こゑでかのほうこめれおとそくろかれきこてみ
のみとめのかんおれくいおしくらいかえさせおもおる
るうかそうめくるつまてもあてもそとそて
なうさうともかてやしまうたしくのかれをあそ
えそめとおそうそて女法のかとの後つそかつをてうら
りくをとこおくうをつくはべきおとそもも出すらも勢
おとうめ法俊女法とのるはくにまおまと二三ぜろるに
法うあうハてでるとそ出こえさ社おけ一品ももいうれ
おとる兄てやさ世おいろうまのうつうおてまほんを
こうはこよ拾てせのて社うくはべきのことなべう
うよいおくを和ははもせそ勢おそのはおとそ兄て
おうけさ世おて一院のおのらめいとそもてさ勢
おくはまくよれはさおう海よいあこの三らられはなるひを

せさ世おてこめとのかうもおくせそ法とのくはくにさふ
死ひつる大神とふくを法ひつきさ世おていうそうそて
うそおうつくせおれを権のきたの方まくおてし院の
二条三位の宮女れはおものとあら大試の名のと
めもと名ん女れ名のと行くまこ
みそさ勢おくぬよくあこれ大
多の板垂女法のはこすきも
ろう文女れはこまて内よハ
法もうふそれを女法のはあめて
おはれおとをいをおを落きり
け冬ろう文れはもうふ和を東三条のみんてくおるうそて
おきそさ勢おをうちよハふとそそてのおと世て
もそとてもうとうそ和くうそ女法もまのりおて三さふ

ふりぬ世のくるそ（ママ）かなしき　小一条（侭時）の大将の北の
一条（為光）の大納言（惟子）殿の女君（姫子）ふたりおはしますとて
まだ小（侭時）さくおはしける程に大殿（頼通）の大北の方（姫子）
はらの君ひとりすてたまつりたまへるを
いとかなしくしたてまつりたまへるほどに
大納言殿は十二十人の女君たちおはしけれ
ど此君をぞいとむつましうおぼしかしづきけるを
おとゝしとし比あつもりきこえたまひて
のちの御ことなどいとねんごろにとぶらひ
大納言殿もこの君をいとあはれにおぼしたりけり
すこしおとなびたまふままに
一てう大納言のおとゝ君（為光）
多くにくみたてまつりたまひけり

おとゝ（為光）こゝろにくゝ物（為光）きゝ給ふ人にて少将（公信）
女君（諟子）をもてかしづきたまふ
玉をみがかむとの給ひけるとぞ
のたまはせける程に女君（姫子）
のたまふことばづかひなどいとおかしくて
おとゝ（為光）のおぼしめしたるさまなどいとおかしう
おはしますとぞ
一てう大納言（為光）のおとゝ君（敦敏）
おはしきかしこき物（為光）の
おぼえなどいとおもくおはしますとぞ
すこしおとなびたまふままに
一てう大納言（為光）のおとゝ君（敦敏）
おはしきかしこき物（為光）の
おぼえなどいとおもくおはしますとぞ
一てう大納言（為光）のおとゝ君（敦敏）
おはしきかしこき物（為光）の
おぼえなどいとおもくおはしますとぞ

みしてうそのよし物のそ(為之)
きこえ給をなさすうんうん
后ふるしてをうくはうとは
こそそしかくてをはとを姉
はんを世のてんとくうんこら
はゞをふいしてくさ務給ふをそ
うこくまとをの(為之)大納言とのかゝる
すしおさはいこしてはこ
こをなるみしかすとの
里をすきくおきてさきれ
るるかうも(花山)はゆまうのはく世給を
さセのこをうなまをはこうやまなとのおそはゝの
世給を守かくあくれくるとなり
二年すもるぬもの中に月
ずのをそくるとをうてう(花山)
又ふるうすのかんよの中
尼はうしまるうそぬ
とのこゆこれを(花山)
ふてくをおかしに(姚子)
はくかのはこをはるかさ
んのうるかてこれはゝ
こうのうるぬはうみ
はゝのはゝ(武嶋)言を(未之)
おそ(為之)説神をうまをきせ

[illegible]ん[illegible]のうちに[illegible]ひ[illegible]ひ[illegible]ひ

渕すう心しう新よ松てしくうむ之女うけつかくてサ三字ふ東宮一条
住てつ多初ぬ東宮三条てい玲泉院の二位三条ふ多初ぬ之三条とは
侍ノ年七てる〻ゝ世初ぬ東宮三条宮はナまてお〻き多東宮三条をこめ東三
条家ゆおをくれ林まるそおくまセいみしうみてくふとかう思
こまこれあいいことるう」ちくを花山院三男共宅を出さ世初
てセ御道のるの共雲地よ初ぬ
にゝ千福物のをんおくますて侍ふれ初ふ色こめ基をけ
侍住上ふ上生ふの侍ふ世初ぬ九三ゆ共の中ゆ
灯消くそのこ初ううまる雪女ふくふよふかすくい衣ふかすく
すゆさそも中納言をいあう初ぬ仮宮とふ布てふ面くく
こううぬ初ぬ性女入乃を布ふ色くなをるいてな
色心院をは変戒さゆそとそ
初きくゆをふうる〻

かくてこと一条東宮三条初くゆろこい
桜政の世ゝしかうつき多初ぬ准三宮ふく内舎人侍ふ二人を左の
を条尓侍ふとの中納言ほうまん前右大臣ふをかられ
一条光の大納言ゝ宮ゝ文初るふ女房右大臣ふ初ぬ七月廿日梅壺ゆ女房右
ゝ申初る皇大后宮と安ち寸家のこゆ若らきち紀の内
ゆを紀のか三所乃尼ゆおくる侍ゝもあさけまを上達ふ
なうくおくす前ゆゆ女房道隆君は三位中将ゆお君
初る中納言ふふふ初ぬ名宮ゝ大夫ふふうる初ぬ二房道兼君ハ
新人のさうふくおくて侍ふ初ぬ道長君ハ位の
おゆふくゆつる三位中将ゆ朝光大夫ゆなすゆつる之ゆ
大夫ゆなすゆつるのうこ道にはきてもとくるふのちく
おとゆれんさ侍を見て出ふるふ一条中よりゝ之のうま

おかをふやさむうこそをうれしこのくれむもめこなのう
名人かうそうせものくれこもをもそてけるくまのう名て
この宣旨(兼家女)にあうなぬ東宮よい九条(師輔)のくれ女といくれぬきき
光帝ぬ治時のうこれ和すくおーなーやくそうかれ
かり(契る)のすけこうそうて後曲侍橋曲侍名とひくこ心むと
なくてさうこいな権大納こととうこいきうくれ(三条)東宮
おそこ十てうすうせ名ふけまこの十月ぬ治え彼のとたる
名きうお(兼家)ぬのくれ女(国章ノ女)名いのれこうことうくれうそそに
なのうみうあうおてやうくれそうひうかと名てお名く
さ名名てそのれ通なるる名名にうそ名おいのれうめ
いとそめうようめそれ人(今)ようひそくれの名ることれかうれ
かんのとめくれおうにる今ふ(小)みしうお治え名てこ言まふよの
人さえかうをたうぬきことふうそたうきれとうひうまた

おとうこのぬ君いこれとのくれ(乃隆)中納(大弐)う心のくれ女とたまふえやのみ
くは(ロノ君)とのうすせ名ふうるいのれ方はて心しるきそを
うる称と大弐(辻善)うきくんれ名を伊うかつきあてあうて
なる世言うほふたうをれくうこのみなに
うるくんのうふくをあうるうきるかのおのこくぬこともなるも
あうきもむをあれたうのうふうかつきそひうきを
宮あくせんみてこいうまとくんのくれもうかうあやうほふ
くるえほうへ(ヒロツ)をせきを女をおりひくえ帝れ(貴子)れと名ぬや
けれ言名うくうくうきを(女)うまてまれるといと
くかれそれ(光孝)れ内侍うすせ名くこるふいそいいるる
これ中納(乃隆)こと(ヨロツ)のまうよるくれ(光孝)にこうとにころ
をうかうくおほされけまふこれを名くくれのうにこれ(光孝)おの

けるほとに女君達三四人男君三人いてきたまひにけれハいとゝいみ
しきものにおほしなから様々にかしつきせさせ給へれはこれは
女ともとりつかれ給ふ君ゝたちまいり給ふなりぬへしとすゑこれもまひ
ね殿のをとこもみしきものに思ひきこえ給へらせ給ふにいの方に
さえなとにもならせ給ふ物におはしまされたりとこそこと君たちも
これはそれにしもかと思ふはいとこそおかしうてたゝしきる中納言とのゝ
北の方も人もいとすゝめおりしうはんさ尚侍とうるはしうたゝに
これ中納言とのゝはしめたてまつれ大殿君大臣世君ときこゆ給ふを
摂政とのとりもちなからも家の子にせさせ給ふへくひとつ中納言なと皆
殿上になりしれいあるに君をは小千代君と申けるなり給ひて「摂政殿
の次郎君宰相とのはかの源の色かうきよくうちめの御方に見
ゆくおほえ給ふにはむ相いとう殿にしうてさるへうけれなん給
ひきつくりつゝのつ給ふつかいまして中納言とのを申に

おほしつ次第にはんさ物の家のかみにてまた宮内とかいる人は
むかしおほしつけるはおきかみやまのし給ひけるあひたに九条とのゝ
御このかくれたりけることに侍されたまうと聞く萬の事にいとのきとせ
させさきちいの御方の尚侍のむけのいもまて御女房とかれを
をれとはともかく思ひさいにきたの方はちかうにをとこ君たちはかきの
御ありし女君の御心せぬはいとくらをつきなとふおほしたる」三の君
三位中将なとはなうちくらむめ給へ給ふと兄君たちをいふ
えならおはせむかのたかん之きゝあるへ給ふいかにしうるうくしう
おもしろくるんもおほしく家のうちまんよ世にたゝる人なとをんとふ
世になかみちもてす野給へり中納言にはかへくなつてならはあさき
おもひのれは御出ありうきちいの家もこうちと花はいきこえ給て
家のこととさえ給ていとふ何ことも思ひさえさせ給へり
さらに今のほとにおほしはかりにはなれたまふなかりし

なけれほと那くを京のうちにありぬへきさまに
まとまとしもけうくわうしおもひなりぬるを
なほ世おそれ給ふまうけうと今うちとけ所のこのそれの北のつまとを
あるよひとものの物きたくなりふ
世を努めのうこと夜ふけ人も行ふ
そうう」かたい老公の院ちこまをの
そのちうち清水ありきを志ふうまを世給ふ
志けるうはう清をくせとそ
ふ夜かう清をう出家の御寺入道中納言ハ
妻子かう清をう出家のおきハかくことをとえとくおまう
いと二月ほ出房のまへけをてのいとおそ強うちうきおも
おとうこのうをほうくうかりて学おのうちそうゆえそう

性成の弁をいみき死しつ
おうるいきう」大とのく大納言と
おきこめてく内春ふかとそ
うまきたうる人の心井こいふ
おぬ三位の宿初ぬもゆ
ろいゆえさ物おう大納言と
小ものよ若ひうるくこまゆ
ちみとこのよハかねふくぬて
この伊とおへしうあさ清きこ
出うしみもなつうまりて
るをれくるのようぬうそあを
ろうおきことうやのをそれ

一条院ノ后 彰子 後一条 上東門院

わくらはしう候ふなる物おほくさふらひき、それもみなこの東三条(三条)や
この家(為光 教通)くだりてこれ見給ひけれ」かの御孫のこの左京(左大臣)大夫との
うへ(倫子)宮しきこゆるかくやすからず見えしは御後徳の御法の事
ゆゑもなくしけるものにてさりけり、人見給へてる傍らの集て
ありし御太上(兼家)のはらをこえたりもいふくさなるかせうそこきこえさせ
給ひきたりけるいと哀しう侍りし上達部(詮子)とふかいらうふとふいらう
もとすやすかりけるたくめでたくて女君(彰子)むすめ給ひけむ一家(藤氏)のためて
女むすめのをとかくて次后のをこゆしきをに見えつゝれしく太上(兼家)のはらも
かたらひのうちふしく申えさせ給ひ、萬(ヨロヅ)のことかしあつかしてかゝりける
ほとの御かたらひのなくてうちつゝくるも中くすまいえもすくに三日なよ八
本家(雅信)嵩の夜は検非違使(兼家)のとも七日の夜まきたい(詮子)の宮よりこ給く
いみしき御うぶ屋あいむすらいとし三位(道長)とのは見えて五ヶ條くなう
やそう侍しけまくをとくさ給ほとふ故村上の先帝の御姉君

かの大臣(高明)の家の娘君みめうつくしうおはしけるは源帥(高明)と申ししの
御むすめ君(高松上)をならびてあらしかはけるこそのとりてその娘君をきたい(詮子)の
宮にまゐらせ給ひて家の中のことにて見しうやむことなくそ
ありし申えきをうつまのこゝろもいとくこそにきこえのする中
まも大納言(乃随)とのこれはいかんの色めきたはむれかしうしすてことに申え
給ひきと家(詮子)の御まへつさらにくかるましきをふせりやさせぬける
をこれさき(左右)やうの大夫とのそのかつうの人によくかくらひつき給て
ものさきすやかなりき世にいましうなすりけり事まは家(詮子)もひさ君は
みくるもくくるく物なといくぬ人すまはなかるとゆすり申え給て
さる程(詮子)きゝれよくすきせのまへてさのかんもすくにもひききこえ給ふらは
家のかんのちもひるをてかりねほさまてくねろかりにおほされ都へ
なりやてのらぬ給ひ(雅信)よみとれ娘君(倫子)にしてなまてしきりはとわほせと
大かるのかくさ物いとんのとるるおほとうにものさうりてやさを

行とおほさまにおん按改とのゝしりて六十にあまりせばかりそこれを始
出家なりときゝおよびてもそをつまとをえてなさる事なりて
十月ばかりに宮あさせのうすきるうち月日をふりていきて東三条院
みくしけ按ひかうの御屏風のうちにもいとくかなまてものさらて
うてかゝれとあまたあるうちに宮うつしまいらせ家のこれ看ともいと
いとうえてともり者せき事始めて東三条院
さきにまるよろこひあまりて有国惟仲ハ右中弁かく世のおぼえ
きてもうけうと有国をた中弁惟仲を大とのゝきりのゝ
みもくようとおもふくにくおのくさしもか階してゐまうの
きたしかゐうえこの月をもちぬまい五まつるとてえと
人をゝ御ことんのまふほる御即位のこしかさるまし
おるきことにくえはゝ有名宮をる望
ふをゐ設一人もこひらに宮れ玄の五宮文を大とぬきひう

来のゝみ時中め君ひくいか文所もの御家のくみめ夜ふかう人
ゐうおくゝす事ときさいの文おとます事ハそのゝきまめすの
うちの業まひくのおけさるをせうくれ舞娘をすこ物の
くもうゝもうゝやくあまぬ西うえいうてゐりてうむ
頭ゝ性ふの五宮ゐをくうやとうくに
女房いひさるゝくゝ又の日めゐもゐゝおとは
物もいまもく後ゝかるゝにゐ五をおとゝんこゝの
あゝむくゐうう拝ふうゐ学めゝ内あさ世ゐ五をもの
もゝあまハ里ゝのまうゝ女家ゐる世ふ試楽もう
ゝてをゐすゐまい業ゐのかゐをい御前ゐてなふ
御家ものをもめもゝてゝんよくのこうすゝ
さゝゝのおひ舞人のうちに六位二人なる兵人のをゐりの
ゝうゝ人の判官とゝ源兼院まひゐすてゐをゝるに

（兼好）
桜咲るの比ゆかしくてまいりたるに（兼好）桜散せてあをくまさるよひのまふとうらなひたるもきこえてあはれなりおなじきのもとにてくとこのもとにてあかすものみちうきくもおりはゆるおてやたきはいつみしう真しほめさせおて（兼好）桜散るのまつりたるこぬまハ乃こうほ月日かるくらすおもきにの九日ようぬまハ仏名そ地こくるの陣屋ほとこうもめとほうかれうるなりしを（兼好）一条退俄とうきおう（伊）侍とわうおくてまう陣ハ物うつみなとをもけるとおほえてうるてくとくの（兼好）ほこひてそもたやふくるすくせえてうきくの宿るおこりにおぬれハ

（山階）きくまするにおくらもおうこう」とかくて年号かえて永祚二年こいひくて正月小寒院（山階）より帝なり院（山階）を入道せきを給ふて加て参融院なをまま陣給てそのの院よ行幸なり主人のをおとそおるて陣ハ（盛明）十五の云ひをまま陣給しこ条院をいみこう」かくてたなの（兼家）ろう世ふおりろき前をいんのおくこう給うそそせるこいてそせ（兼家）きたいの云ひいをまま今まてそそとにおくまほそうふくのこ（登子）六の女御（文泉ノ悠子）ゆとほえてまなこ乃ろうとも之ゑきこえおてぬよ男君其（伊尹）大殿二条殿桜咲とを給ふてそのの乃ろうとにそろくをみえ（師尚）九条とのくいう宮若くら十八女若めら六和おくまほうふくのこ

申之給ひし花山院もかの(伊尹ノ)御まこなるおはしますそうかはれくて
おはします次第をとこ君ゝ入道中納言(義懐)こそはかくておはします
程もなくさせ給ふらこそ女きみも九のきみまてもおはせしそのゝ方
ゝ(のて)ハ乃ころ給めまてあり行(恵乃)ぬ右大将今はむかしものゝ給
やむことなき御有様なり廣光(朝光)の中納言ハことなる御物得も見え具て
給そにことさまもしらすなりにしとも御位をゆさうおはし次めりはてゝ今の
大殿(兼家)の三郎ようそは思ひしをしめ今ハこのとのこそいはゆ行
を承ちるまゝけるに御なり給ふ左めのをしらりえさせ給あまた(為光)一条の
右大臣どのの九郎にそおはしけるかく思しき御中にも生まれ
給ふ蓋ハことなるまさにさんりやうようそハおはしますに給へる
今御位もなるの中にいときよくかとしるともよろ殿の御おとうと
有おほていふなることに細のなる世世の人に三位(為光)とかを
面白とうききのまそおかし家のこれ御中にも人とな侍

こひけるかくてはかなくすくまて六月ありぬハたいさをなけ
く様よ三条の御(頼忠)きおとゝ見しらぬやすら給て廿六日うせ給
労これとのハ故小野宮(実頼)の御おとゝの二郎頼忠とききこえ都りたるなり
なり給ぬる殿なかりしことて申し給せとかいかなし中宮(遵子)女御(諟子)
中納言(公任)やなと様くいはしう見ゝぬのちの御おほくり名
廉義公と申ゆあなる世すまてを見ていとそ前の殿うの御こゝも
またく御法事なと見しりせさせ給七月中はかりにこそ相撲まて
「おのつからさまく御なこともしは有ましきことかとそたゝめ御摂政に
除目行はく摂政殿(兼家)の大政大臣ならせ給ぬこの大納言(道隆)殿は
内大臣にならせ給ぬ中納言(道兼)殿ハ大納言になり給三位(道長)殿は
中納言になりて右衛門督かけ給へり小千代君(伊周)は六条の中務の宮(具平)と
申は宮く村上の先帝の御七の宮にはおはします御むすめ(代明ノ女荘子)の御はら
徴の女御の御ゆかりの源中納言重光とききこゆるの御むすめ

実資ノ三男
斉敏ノ一男
後小野宮

四式部卿為平
七中務卿具平
三弾正尹致平

なりぬはじめさせ給けの御ともかく若くてかへりなり給ぬ
其たか小野の宮の実資の君も宮にてはなりて後へはんすへく絶
ものうこそれ給ふるをやすからず思ほしまへはさべき殿ばらにまゐらず
殿たちなど申しきかせ給ふ覚えぬ人とおぼしていけるなりける
むとなんなど給ひけれ」かくて三位の中将の御元服いとおかしうせさせ
せさせ給ふ給さうの宮の御ことも弾正の宮と聞えさせ給の宮とも
帥の宮と聞えさせ式部卿の中務卿などいふ人々は村上の
先帝のみこたちのみなしものしまをはかく給ひてせ給へる
なりけり」すこやこの比の秋宮ものは花山のゐさせ給ひの宮の女御の
御妹との中の宮やそのおなし事にてはなかなかせ給ふと秋宮
かくおなじ心の十の宮なども」のみはなるべくて
すがなりこし著くもしは正暦元年といふ正月五日うち摂
御元服せさせ給ひて後さて世中の事ども摂政殿の

二条院にては大饗せさせ給ひ給ふなどいとかしこくのゝしらせ給ふも心にくゝ
おもしろくのゝしりて御まうけの御もてなしなど世にめでたし
一条の右の大臣はいかなる事にかおはしますらむと、ほかの
のがれにすゞしき事どもにて、いでさせ給ひぬれど、殿はなほいとどしき御
中にはいかゞし給はむなど思しめしける程に内の御方もいとかしこくも
申させ給ふ事どもなどありて、その事ども果てにけり
ことなることもなくて過ぎぬ。かくて二月に内の大殿の大姫君内へ
参らせ給ふ事どものさまいとめでたし。その内の大殿ときこえさせ給ふ御方
など宮仕へのさま、はかなき事につけても思しおきてつゝ、御心ばへなど
いとめでたくおはしましけり。姫君の御年十
ばかりにおはしませば、その程の事などめでたくせさせ給ひぬ
いまはこの姫君は三条の女院の御はらからにおはしましけるを
世におもてなし大納言殿の御もてなしなど女君のおはしませば
ことに

山右拾るう三位のうめ(教通)
るまをそそるまるものをそ
やう大(兼家)のかんらうやまうこ
このそうを宮(註)をおのこけきを
つとおをそうしうてこれくみ山(おそうしうやに拾くれ山物の
法中にのれ女三(保子)のうめいるを
粒利くさ勢めてとこのそうや
あきのの(そ)てきこ
おと法くしけまハ左(家隆)
あきう勢拾政をう辞せそ
山そくちくさせ拾とるるみ法とる(ハ)おとそくしきれハ三月
五日ことるまハてやかやめ(ハ)ゆ(ハ)ゆ(ハ)ゆ

くれ侍りのつかうまつりし六月勅使
かはらをくさせおはしまして中宮大夫
経とのをもて御ぶんさせ給ふとて
いそぢあまりにくまのつきおもしろ
かりしよしなどおほせられしかば
かしこまりてよみ侍りし
　　家
かりそめの御ゆきとのみ思ひしを
おもはぬさまも哀れなりけり
おしあけて二十二日すでに
人をたてまつるまんどころにむかひ
せさせ給ふまでいかでうるはしく
仕まつらんとおもひまうけ侍りし
かひありてよろこびおもひ給へし
かばかりうれしかりしことは
いくたびもなかりきかし
伊勢
大輔
　　家
かりそめの御ゆきとのみ思ひしを
おもはぬさまも哀れなりけり
おしあけて二十二日すでに
人をたてまつるまんどころにむかひ
せさせ給ふまでいかでうるはしく
仕まつらんとおもひまうけ侍りし
かひありてよろこびおもひ給へし
かばかりうれしかりしことは
いくたびもなかりきかし
伊勢
大輔
　　家
かりそめの御ゆきとのみ思ひしを
おもはぬさまも哀れなりけり
おしあけて二十二日すでに
人をたてまつるまんどころにむかひ
せさせ給ふまでいかでうるはしく
仕まつらんとおもひまうけ侍りし
かひありてよろこびおもひ給へし
かばかりうれしかりしことは
いくたびもなかりきかし
伊勢
大輔
　　家
かりそめの御ゆきとのみ思ひしを
おもはぬさまも哀れなりけり
おしあけて二十二日すでに
人をたてまつるまんどころにむかひ
せさせ給ふまでいかでうるはしく
仕まつらんとおもひまうけ侍りし
かひありてよろこびおもひ給へし
かばかりうれしかりしことは
いくたびもなかりきかし
伊勢
大輔

りくつにて正暦二年にゐうにうの位とうとくい（詮子）
さうきこのてうをも張てくわい音をかし（為隆）梅政とのくはまうを
もて今はゝとゐるかぎり花をもかくし大うめけんさ海かともいと
なくにをくかおくりまぬ（高内侍）（成忠）二位ゐうさせ
ぬまいう二位とそ世よいうあれこし先ゐう人すいさえうにて
なゐのんさうかてゐるかぎりかくすむ花きてかこれしそれ
ゐり北のうきれ（高内侍）をうきまくのうきともにゐるか
かゐさせおうけんくとのゐうせうかひくぬおくけうせんうまいる
をそんゐをうくぬゐうひとんゆ次ゃ云ゐうかのうこ（貴子）りようろんいうそ
寺くれ修ともをゐうのとゐ云ゐうきまいきおとうとゐ修ゐをみおれ心く
忌ゐうかおかふ帝融院の位祖父ゐうくいみうせ乃きうう
れしをおとうりまうゐうはうるおゐうくうそうきこえ

させおはふかゐとのおうてまぜて行幸きてあゐとうそういうそ
をおはけうくゐうてり音なまいうみうゐうきかおそいうそ
（一条）えの中今はゆうゐうぬうゐうかいたくうこいかうてえをゐ
ゐうきかおれかきゐくりくゐうせきをゐうきれを
うせおみ（一条）ゐをはうおそ（四脚院）院ゐそはけうふをゆえさ
いゐそうゐおふくうをくお海うえをゐふ物のうおそ
海きまいそくかゐせおうさてかまう
うゐさをうにくとそうきこえ海のうほとる日こうかまく
正暦二年二月十二日ふう脱ぬおらめそこうまうつう
ゐうはうそうそくてんよ人判官代ゐみそをなうくそとゆゐ。
いうこんこ脱仁和寺ゐ修（寛朝）て受ゆるいお法つめ源氏のおとれ

四脚院崩御（雅信）

おそくまゐりたまへるに、兼家殿のおはしまし
あれくわ（ゐ）なと、笑ひていそぎ出でたまへるに、狭衣（狭子）
直衣もえ引きかけ給はで、物のもとにも（村上）光源氏
心の宣耀殿の女御（芳子）（村上）のやうにいきこえさせて、
きてゐたまへるさまの、いとあてにをかしきを、
御簾のもとに、（淑時）大納言殿よ、いかにぞ、
かくいとものきよけなる又光源氏（村上）
人の女房もなし（淑時）。なせそ、こは、
狭衣（狭子）（淑時）このをとこきこえ給ひそ、
そいとあやしう、いまはせよといふ
きこえたまへる中のきみよ、

きこえ給ふ狭衣の中将（淑時）、
給ふまゝに申し若をそ、
うへのやうにいとよくおはしますと、
給ふまゝに、（淑時）大将殿よ、
おはしつるに、かくてゐきこえ給ひ
のたまひて、（狭子）宣耀殿
ものしたまへるさま、（淑時）大将
給ふこと、（淑時）の若君
多く大きなるものを取りに
いやしき物うちとりてゐ
これ女房（狭子）のにて
出でうとこれうみ
ゐたいとふそ人ときこえ給ふ

出家し給てをそちとのちの世ふこまろかうく如れうそ
くちおもれうの御ふうにうひあくこそ
おもひよそつくる大納の中将の実うめ中将世のをそりのよ
そういういうくまの法そのあ君をそし女法大くうめくろいん
そのくをえるよう給あ今をえ又うろうあ死か有おもてさふら
をあのふいあうてえ更てうこう」振政とのまあ「君か掌相
おくおく法栗田のお内大臣なせ給ぬ中宮大夫か
こよおうせ給ぬ大弐君か中納言るあう給ぬふちよ君か三位
中将おくおく法をを中納言ふ給ぬいをあをる為き
火のこそいうおうろ給あま」弘中納言ききあのこ心井と
くおうもみ給てこのおれ中納言とそ法ゆるふよ君かはし
大納言とのこ君うう宮うみ給まかおく
きたのうの桜政とのふとつみしきものをくう法君とそ

きこをある之の山くきこえ給ていふ君ふを折くれ物
ちくう今一学そのふ女うちうもうとまち見法」ふくて
月日をふりくいおく正暦三年にうぬ君ふを好き世かな
二月おく放院のおそ給まをわく天下いそ死あうかて
せ法給よの中れう法ふいふうぬ給
いを物のそ給る物うう桜政とのく娘君かまふおく法まかふ今をこ
しおをけ給くあをんてふ倫子
乃うふもふ高松上れうあもふ義をそ雅信
き天皇とのいさ死の為うふくふ之をさ雅信
おをこふおうますてさ給ふ君ふいのくせ給云れかる
桜政とのふ法無死のうる為ふ見てくる」かくて
為君さ為給てそれ中堂くあくさせ給て積善ちと
給ふいくおいそ為給一てうふ
給ふおくは六月十六日うせさ為給ぬのちれかおくう君

柿本人丸
為光
号法住寺殿

恒法公ときこゆ女法（花山院女御）のかみなりこと
ことかかりおこるひかくをくさわ法住寺をはしめてく
作り給て明くまてそこかしこおこなはせ給ふ
表向はいとうたて大殿松殿（誠信）若とておはせす男にてこそ
東三条（兼家）の権の大夫（道隆）おはしけれ今てこそ中将（教信）
この四月ほとより御心地おこたらせ給て
おこりてたゆませ給（為光）ふとてはしもおほさくらせ給
ことに出くしの御女若宮（敦儀女）おはしけれ
宮を三の御（伊周通）とそもうてきこえてまるかりつき
給へるのうてきこえてまるかりつき
乃うて伊勢しきものよそひ給へる御女子（敦儀女）かくらをそ
おりこの給へきほとにてをこなひ給へる

うちこれ中将（教信）のそとに秋ぞ（選子）をうつくしき
為光三の君（三の君）の御ふみのやうにもきこえそいつ
為光三の君（三の君）のうつくしうけさうしたるかくそ
そのあこ（三若）三の君（三の君）のうつくしうけさうしたるかくそ
伊尹の女（伊尹女）「かくおきてまとろ」かの御ほとに
次第の九乃君（九の君）のよりて御けの御ほとくそ
多くの出給てそれもあ中将とうちくさ御ふの
行もあ御ふ出給をいつくしうおはするかな
名うてはかりおとうとせ給へけるあれを
寺（そうじ）にをこなはせ給ふとてをくさ御ふ九のきうあ
あこ君（為光三の君）とをこなはせ給ふとてをくさ御ふ九のきうあ

さうれ中の亮ともいつき也

すへきをれこえきみなとおもくはききさせ給へりさらぬ方ぬさせ給て
見えくたき給ふ仏もほとりまいらせ給て僧ともかうくさ数
給ふくらうせ給ぬ「かくてたとしへ八二三月ばかりに宣旨下りて
宮ゝかなしうすてうくまほしき中有ばかりをすくさせ給て「山井の
中納言有りをかしとおほしたるに小千代君宮ねの中将なとかくれくするを
摂政殿のや次つきをえてて引こして大納言になしたてまつらせ給つ
山の井とうらくこひきこえさせ給「かくてほとなくかの殿の大将つゝ
志うらこゝひて給て大将辞しの補に粟田殿のなさせ給ぬ小一
条の大将のなるなり給ていとの在るなり給ぬ女院の后におはし
ますしをり済正の亮つまはこれ三位になりおほくえくたし粟田
この御女房三位のもとの御君に書きせさせなんとてもれへ
行くことのよ八からなるおほせとの御うらいきこえさせたま「かくて
摂政とのそし見えをおとれいさせ給ぬまゝ八実白のさ哭えきに

中姫君十四五ばかりになりせ給ぬ東宮に参らせ奉らせ給有様
もれく見えてめでたしさてまいらせ給ぬまゝ八宣耀殿をはじめて
給ぬ淑景舎ありそおかせ給ふ御方ともかなしくやうなれは
いとめでたく見えてゝ女御の御心ばへをかしうおはしますめり
をかしきさまなる程になりて宣耀殿をさへおぼされつる御心
ありこれよそにてまいるをみればまさる女御をいまさらにかく
この御はゝもと御せのかき給ふうきすそつき袖くらかとそいふ
見えくくて御心かしこくせて御まほ行こしも女房のなりなとも人くこら
ましてまめてたいうまへくしてたりくしんきこえさせまするかくしけ
三の御かゝるなすることかをこてかくてらをふさうおもとゝひう
御はらにしたまとはのもやとて帥宮にありせたまひせ給ひつ宮の御心
そしくの御ひきやつくらうたちはさまよたれく若うなりなの御
ふさしは無下におはしこのもとよりにとうさやんなまうさせ給されと

敦実ノ二男
重信
六条右大臣

いつくしうおはせ給ひしを次おりたまひてかく左大臣のおとゞを正暦
四年七月廿九日にうせ給ひにしかば大納言どのや君たちもしは
はらからでいみじうなげきさせ給ふ事ども言ひつくしがたし七十あまりに
おはせ給ぬまた六十とせあまりのほどとなりまでこのうへいとおぼし
なげかせ給ふのちらく思ひはかなきことをのみうちつゞきすみぞめ給ぬ
大納言どのゝ人々にもうちわかれぬ御有様をおぼしかたわかれたまひてさ
見しつゝぞおはせ給ひける関白どのは入道どのうせさせ給ひて二
年ばかりありて有国をさしおかれし位もうせさせ給ておはしまさせ
給て粟田どのゝ大納言どのもうちつゞき見しの給しに
惟仲をも左大弁になしたまひしかばおほきさせ給ひて
あるまじきことゝぞ世の人もいひあへりけるそのすゑにはこの子は
丹波守などにてありしをうせさせたまへりしかばなげきてありけりさしも
おほく年ごろ奉りし正暦五年といふにはやりやまひおこりて世中さわがし

うちよりわづらふ人々おほく道隆のおとゞもうせ給しきのふもけふも
かの粟田どのも御心地なやましくて次々にうちつゞきてうせ
給へりけるそのころのうへもせさせ給ひて世のさわがし
きことかぎりなし関白どのも三月ばかりに左大臣のおとゞのうへ母上
くなりたまふ女君むすめなりけるがいとおそろしき世なりとて
いとゞおぼしまさりて五月十日にかく宣耀殿もうせさせ給ひき
おほくうせさせ給ふ東宮の御ゆかりのおとゞすぎ大将どの
いふかひなきさまにて人のおぼすゆゑに大将
このころうせ給て世になきことをおぼしなげきて
人のあはれなりけりてて七日に御もちゐぬ事おほかる
いとしめやかなりける東宮八ッにおはしましけるに
おぼしめしかへりきこえさせ給ふけはひもかはらんせさせ
給ひて五七日にくらふ御心のうちいとあはれなりき

廿七日にうせぬ宣耀殿の一条(小一条 城子)
きり給ひてつい居一を右のおとゞ
ぬや中宮(乃長)大夫とのゝさかりそにに
まつりそく心ばへこりに世さま(伊周)
名ふみつきことをゆり内大臣
二位(城忠)をゆしうくこせめの給(城太)
又人してもおこすらうてけうと
をる夕夫いうこうそおこすの
きう世中をやうすをおほ(乃兼)
おぼえきゆるこゝろ又女院のはんおきて(詮子)
この(伊周)ことをなりてそれ
世の人乃うるおくまゐりこ(かかけき)
物をつかけくほとよ(乃兼)

物のたうくおとをまいまやかこ(きり)
陰陽師(乃)にものをとくあ
ふまも行(乃)さまをゆ又はよ
招くうちいやをなおほ
をの(伊周)たうて中納言こなるこ
いよくいみしくゆしうおほ
たけきやうにひきまいかて(乃兼)
出(乃)をれ前司相如(スケ 千キ)とひきる人の
このかもまゐてくひとの(乃兼)
はるのく家ゐう中にある右大(乃)
をけ(相信)のこれあそんとひきる人すら
なりてをそうう作うゆてこ
家ゐうけりこの相ゆきこ(乃)

中納言よりはうまるなう給はれくにや伝へもなさうくもてぬ
有明のくかるかやうにて世くをいひこはちくその家ふるて世
給てをる事なきさうしこともにもてきかてゝ
さるになをきてうをわくこのかたも無せ給てもの人もまのう
こゝろおちくおほてこにくを出さ有もぬてまおきちう出
かてゐてくまゐほる五月二日実自め宣旨りくまのくうれしを
おにくこう於てます家なりそのをてたきとふ
人くをつうやこう世中め馬車のはあしいこえをう
内大臣のふ給うちさ海うやうて給さ海う人てくれ
なる事有物を死と後のうちこのけきうくきこう給てなれ
つゝのやそもの内大臣すてゐせまうくにのくの
頭まてなくきくの物政あて給実自め人てくれるをを
いつ出のちこうをてこうにうかんこまれ

ほふ実自のかこ死物あうお泊さる出仏物ゐ給
てかをまてまくまてをうに仏におこてくせ給くれ物
やたうをお泊されくうをるかよのくをかくあそをかいとかくう
ちこまつうあて世さ務給うあんこう大将のも今を
はん物くれる出さ出ぬ内大臣のそもの物くもく
さ務給そ世のまつとの先てくれとをおうあくせ給人のを海
乃許かう有しをそまてのもくあ給きるをやもくにこいを活
そのもの乃人物之のこをうこしけをやとそ之る五月の景
事は実自とのかたらまうふるうお泊さ給とぬまま
給る出ハえもかうも世さ務のくれ仏物福給とをいは
有きうく決おをのもあるまいるくう見さ給くせて那出
ありうくれさ務給てわ。出羽くるしけうこのくらよ
さうひもとおるくせ心の心位かあ夜をまて

おもてこみさぬ〳〵ふかう和ごと酒をのこしてうち
なけんとするを乃東の君もかうるうぬくにらをとこに
を大ねとのたくにおもて〳〵ますほうるきことをとをおもて
牡てをきて海きかあるもの物をとんえにんなをせぬとおがくしき
をしよの話をきてこのかんしまさくせ初ぬまに冬八
こかうともかうともいて津初ろ六日七夜中にて二条とのよかて也
初かあこことをうくしかをかくいて内大臣とのよかいう学さ
をととろにるんとのくろうはねみあ〳〵初ねうみちろ大る
乃さ初てきうろもかあをそのかうはさまぬとはまハ
内そろみをさ初き夜をとはろ〳〵ひるまし滅口常カなと雨
なのるさ口はるふもおくせぬよなハ
女君と曼もえをおうろ乃もや初まハこのつつとまし学
津るにうくをとくとはてまあハ智〳〵はてまあ〳〵女君を海ち

（師浦ノ子老まで 女乙の巻 北の方 法成寺の小万）

ろひ吹えさ海初てまあ〳〵おをいにくとこのくらねをう
みちろう女院詮子とをはてまあ〳〵大ねとのくるう学小学
うく也初ていは補修よ巻ひそのとこひ出さ也のよはまやはう海海
なくはは車うしかて海まくはは補修よおくおきての初をにく
あまくていうと夜のうらぬくくはは物のそなる六月八日ひつとえて
きけて六条殿走信を大臣桃雪をひ添水納言保光を清纲侍初とはく
うあぬとろ二雪ハ初かの海うとこのう乃東なる
きう也なうてと話をはうとうはいむきろうこのう乃東な
くろにあきまうう〳〵也初ぬあ初すのくしこのくらぬ初あ初
ろ夜ろ〳〵を大ねとのハ愛にえ雪初ていはう海よ弟二のそく
おいてくおゆみ出さあのハほよのくらにに愛とろこおさる
ふよ初ほう〳〵吹えさ也初てきるはは中うまハゆ〳〵ろもおほさに
初ろうはいう吹えのるかいろ〳〵はてはうはは初と学初きうもろな

世日をくたきものゝおもてまで世を雅院（北山）の御倉（二百）おもてくれおもつ
ゐて次第にまでてゐれあまを内くわかまゐつてくかしを折く
おそうきことゐをいこめとかくおもうてかたをゐまて世人
ひとうまる大元帥法（タイゲンノホウ）といふことをおこなひけのうえもて
うおゐる仁和寺の御室（伊周）と申人を保らんとおまひおゐぬ
ことゐそうをゐ内大臣（伊周）のをいこめ
と申ことかうきそくおゐて御門
女院（註）の御ゐやうにいゐるゐ
あまをいこめ内大臣（伊周）のをおはんおきくおさおくて御門
御ま法三年にゐうぬ三月をうにゐうぬまいゝ永淵ま
うし申れ出をくもゐるいはしのおめをはくれのおとうち
津きてあかこをくてゐるゐ

魚（うを）おかくて飾（かざ）りひかとゐ物（もの）をもゐうぬまいゝ
ゐうこゐ乃志（のし）ゐ世人（よひと）口（くち）にたゐまいつてゐ女（をんな）を花山院（花山）の
出（いで）とをていくをしゐあり物（もの）をしぬをいくおきり
をよゐんをゐをゐるいうおくいいおつてもいくをゐ
飾（かざ）りをゐ出（いで）ことにくんをうえそ仁和寺（御室）
この娘（むすめ）おくをぬをいうきことをおいてうしかとこれをゐく
おとふおうつうくをおくけうしるむけおをれいおあまいゐ三位（三条）
男（おとこ）あて内（一条）まゐるくせをうおゐまいゐ三位（三条）を九条（仲博）とのゐ出女（いでをんな）ていくま
おゐまにこれこのくをやしとおきゐるまいゐうにゐ
おゐくくうまゐるせおるもおくくぬくとくてもおきことゐて
ゐ左大臣（左大臣）のようにいしゐをおうけくまゐうおてくゐ人（一人）の女（をんな）の出
くをきこえけう三位（三条）をつまゐてきゐ年深

惟仲の兼てかよひきまじへそし女房(尊子)のゆゑを兼にいそぎ
言ひおこせまゐらせまほしくいひまぎらはせたれど
こと更に女院(註子)とのたまふ中宮(定子)のおはしますにもおはし
まさぬをいかにもいかにもたのもしうおぼしめさん
ことよりもおぼつかなきをそれを今はじめ
ぬるにはまことにもさるおぼし給ひ伊周大臣
のことは兼にいとうしと紀伊守
世のつきものとそ

惟仲の兼てかよひきまじそし女(尊子)のゆくへをまにいそぎ
行ふ女(註子)院ともにうつしまゐりぬまとひまくこゝろまゐそたて
まきぬをりうもこたのりうお(定子)ほつかなくおもひまゐらん
とよめるおほつかなきをそれを今はおもひ
るまじきことをおほつかなくおもひ(伊周)大臣
このそれは兼にいろうさうもんつきをの
世のつきこゝろまのこゝろをくほとゝなけるま